

《 タスマニア旅行記 》

今迄積立でいたお金で、そろそろ旅行をしようとの声が出て数年。やっと、昨年末の 2012 年活動予定で、旅行の計画を立てましたが、どこへ行くのかがなかなか決まらず、最終的には、複数の希望者があった『タスマニアフェリーで行く』案を、ある程度強制的に決めました。他にも複数あったパース案は、金銭的にボツ。

そして、E 子さんにツアーパッケージを企画して貰ったのが今年の初め。まだまだ 1 年近くあると思っていたのに、アツと言う間に当日となってしまいました。

と言う訳で、11 月 10 日(木)～13 日(日)まで、総勢 10 名で弥次喜多顔負けの珍道中を繰り広げてきました。

スタートは、フェリーの乗り場から。「午後 6 時、トラムストップに集合」と何回も念を押したのに、フェリーターミナルに直接行ってしまった N さんと K さん、車で送って貰ったのに船が見えるからここでよいと降ろして貰って 30 分も歩いた Y 子さん。バララットから電車で来たが途中で長時間止まってしまい、船に乗り遅れるのではと気がきでなかった S 子さん、その人と同じトラムに乗っているがお互いに気がつかない M 子さん。そうそう、我家にもう着いたと電話して来た I さん(私は未だ家だよ)、まともに来れる人はいないのか!! 先が思いやられ、不安が…。名前が挙がっていない N 子さん、K 枝さん、A 子さんは、私と一緒に来たので問題なし…。でもないか、いつもは早い N 子さん、なかなか我家に来ず、3 人でヤキモキ。彼女、我家発を 5 時としていたのに、「ラッシュ時なので、それでは遅過ぎる」と 30 分は早くさせたのに。

トラム乗り場には、このような我々が余りにも心配だったのか、旅行の手配をしてくれた E 子さんが、差し入れを持っていてくれました。

チェックインを済ませ、いざ船へ…。と、その前に荷物検査が。我々は団体と言う事で、個人客が済むまで待たされましたが、そこへ電話が。なかなか中へ入らずたむろしている我々を心配した E 子さんから。後ろを振り返ると、ガラスに顔を押し付けるようにして見ている彼女。初めて旅行に出る子供を見送る、母親の気持ちだったのでは？

最後になったとは言え、やっと乗船。部屋に荷物だけ置いて、早速夕食のためカフェへ。もう既に、他の乗船客は食事中。

酒で盛り上がっている人達を置いて、食後は船の散歩。上の階のデッキへ上がって、海からメルボルンの夕景を堪能。外へ出るつもりではなかったのに、薄着では海風が少々身に沁みました。夜景の前にメルボルンを離れてしまったのが、ちょっと残念。その後、大きな窓がある場所で暫く休憩。再度デッキに出ると、きれいな満月が出ていました。外は暗くて良く分からないながら、島の灯と見られる光が、結構途切れる事なく続いていました。

船室に戻った頃から、まっすぐ立ってられない揺れが出始め、狭い船室にいたのでは気持ちが悪くなりそう。ラウンジへ行こうと、シアターの前を通りかかると、丁度映画が始まる所。それではと 1 人で映画を見る事に…。これが数時間後に思わぬ悲劇を招くのですが、その時は何も知らず、『Water for Elephants』の映画を楽しんでいました。

12 時に映画が終わり、余韻に浸りながら部屋に戻ると、3 人部屋なのに既に 3 人寝ているではないか(どういう事?)。その上、掛け布団はなし。しかたなく、部屋にあった小さな椅子 2 脚を並べて横になったが、如何せん寒く体が震え出して来ました。レセプションで毛布を貰って、数人が既に横になっているラウンジのソファで寝ようかと思っても、レセプションには「緊急の場合は電話して下さい」と、電話の横にナンバーが表示されているだけ。毛布を借りるのは緊急時か逡巡していると、そこにいた男性から「クルーは既に寝てしまった」と言われてしまいました。

そう言えば掛け布団の上にバスタオルがあった筈、あれを掛ければと又部屋へ戻ると、増えた 1 人から「向こうの部屋に布団がある」と自分の部屋の鍵を渡された。その部屋の毛布を取るため電気を点けたので、寝ていた 2 人を起こしてしまいました。「ラウンジで寝る」と言う私に、「上の段のベッドと変わるからここで寝たら」と N 子さん。それから 3 時頃までおしゃべり、やっと電気を消し暫くしたら、何かを落とした大きな音。上に寝ていた Y 子さんの眼鏡が、下の M 子さんの顔のすぐそばに落ちていました。

遂に私は、一睡もせず朝を迎える有様。これら一連の出来事も知らず熟睡していた M 子さん、朝目が覚めたら、何故か私が自分達の部屋にいて不思議そう。貴方は、爆睡していて何も知らなかったのだから。でも彼女、ずっと顔をしかめて寝ていたの、我々が煩いし明るいので寝られなかったのではと思っていました。

この騒動の起きた原因は、船の揺れが激しく船酔い者が出て、私が押し出されてしまったとか…。可哀そうな私、と自己憐憫に落ちてしまいました。(皆は、この騒動を笑って聞いているだけ、この薄情者達!!)

やっとタスマニアの町が見え、6 時にデボンポートに到着。ここにも、マクドナルドがある!!

降船するにも、エスカレーターが動いていないとかで、階段を下りて、車の間を通り抜けてやっと陸地へ。乗船の時とは、大違い。そして波止場には、まだまだ我等の本性を知らない、ツアーガイド兼バスドライバーの大久保さんがにこやかな顔で出迎えてくれていました。すぐに、その顔が引き曇る事も知らないで。(50 代から 80 代の女性 10 人と言う事である程度の覚悟はしていたと思いますが、我々を理解出来たのが案外早かったなあ。)

人数確認後は早速バスに乗り込み、朝食予定のチョコレート工場へ出発。

タスマニアは、空気の匂いや味がメルボルンと全然違う事を、降り立ってすぐに感じました。とっても快い気持ちの空気です。大気がきれいなのだろうか。

朝食は、果物盛合せ、フルーツパン 4 切れとバターとチョコレート、紅茶かコーヒー、ホットチョコレート。皆、パンが食べ切れずお土産に。ここでも可哀そうな私、フルーツにリンゴが入っていませんでした。食後は、売店でお土産を買ったりチョコの試食をしたりして、次の目的地チーズ工場へ出発。

チーズ工場では、タスマニア産の山葵を使ったチーズを試食させて貰いお土産に購入。私 1 人、牛乳も買って飲んでいましたが、皆から味が違うかとの質問。実は私、普段はライトの牛乳を飲んでいるので、違いはよく分か

らない。只、スーパーマーケットブランドの牛乳よりは、味が濃く美味しいのは事実。

次の目的地ロンセストンへバスが向かっている途中で、ガイドさんがハリモグラを発見。わざわざUターン、徐行運転で我々に見せてくれたのに、「脇見運転をしないように」と心ない事を言う人が・・・ご想像通り、私です。

その辺りで、朝遭ってからの我々の行動を振り返り、ガイドさんも婦人部の本性に気が付き出したよう。さっき説明したのに同じ事を聞いたり、バスの中で罵り合ったりの我々に、「聞いてなかったのですか」と厳しいけれど当たり前のお言葉が。前を向いて運転しているので、聞いてないだろうとバカな事を言い合っていると、時々お返事があったり。

そうこうする内に見えて来た Tamar 川の景色は、スイスの湖の様・・・尤も、スイスは行ったことはありませんが。そう思ったのもあながち間違いではなかったのか、スイスの様に造られたと言う家々がある通りを通過。どの家も素敵なメルヘンの様な家にきれいな花の咲き乱れている庭に、このような所に住む人もいるのだと一同溜息。目の保養をさせて貰いました。そして、テーマパークで一休み。勿論、我々はお土産物屋へ。チョコレート、チーズ、お土産と買い物ツアー状態です。

そして、ロンセストンの町外れにあるカラタクト溪谷を散策。「昇仙峡に似ている」と言うと、同意する人も。「昇仙峡は何県だったか」と聞く人に「甲府」と答えた人は・・・そうです、私。ちゃんと「山梨県」と答えてくれた人に、「甲府の方が分かりやすい」と理不尽な事を言うのはIさん。その周りを歩くための道を教えるのに、何度も念を押しているガイドさん。大分、婦人部を理解して来たような・・・。途中では、孔雀が羽を広げて行く手を遮っていて、狭い脇を通り抜ける事に。

次の予定地は、あの『魔女の宅急便』のモデルになったキキのパン屋さんがあるロスの町。ロスは小さな小さな町で、ゆっくり時間が流れているような所。ここのパン屋さんで、昼食に。厨房のパンを焼く窯の写真を撮っても大丈夫とガイドさんから聞いたので、可愛い衣装を来たお店の人に「写真を撮っても良いですか？」とお願いしたところ、慣れた様子で、わざわざ窯の戸を開けてポーズをとってくれました。一緒に写真に入って貰ったりもしましたが、「最近宮崎駿ファンの多い中国や韓国からの観光客が増えている」と、ガイドさんの話し。その後、屋外で食べたホタテのパイは、美味々々。私は朝食のパンの事も忘れ、翌日の朝食分も購入。

予定を大幅に遅れて、夕方、ホバートのホテルに到着。チェックインをして、各部屋へ。ガイドさん、帰る前に不安そうに再度、明日の朝の時間確認。完全に、婦人部を理解出来たようですが、その通りですよ。

部屋割は、バスの中であみだ籤で決めましたが、一部不安のある組み合わせが・・・。

まずは、部屋へ行って荷物を置いて一休み。夕食は6時にホテルのレストラン集合としましたが、時間丁度に同室のM子さんと行くと、既に皆さん席に着いていて、びっくり。私なんか、6時に部屋を出ればいいやと思っていたので・・・そう、不安のありそうな組み合わせは我々。

夕食は各自で注文をしましたが、まずはオントレを頼んだ人から料理が出てきました。が、その後の料理がいつまでも運ばれて来ない。メインしか頼んでいない私は、お預け状態。ふとテーブルの上を見るとS子さんがオン

トレを食べ終えずフォークを置いて話しているではないか。終わったのか聞くと未だとの事、「オントレが終わらないから次のが出て来ないのじゃないの？」と、お預けを食っている身で少タイライラして言うと、やっと食べてくれました。ホラ見なさい、終わったら即メインを持って来てくれたじゃないの、もう。海老のパスタはとても美味しかったのですが、如何せん量が多い。パスタを注文した人は皆、残していました。

夜は、私共の部屋で酒盛りのようですが、お酒の匂いも嫌いな私はさっさとベッドへ。昨夜の船の揺れを体が覚えているようで、不安定に左右に揺れて、寝付くまでには時間が掛かってしまいました。しかし、前日の一睡もしていないのが手伝ってか、朝まで一度も目が覚めませんでした。

翌12日は、朝9時にガイドさんの迎え。先ず、Kさん待望のサラマンカのサタディマーケットへ。三々五々、買い物へ出発。先ずは、明日の朝食用にレモンタルトを購入。背の高いY子さんが赤い帽子を買ったので、これ以後、それが目印になって随分役立ちました。オーストラリアの動物を針金で知恵の輪に作っているお兄さんには、どこから来たのか聞かれたので、「メルボルン」と言うと、「その前」との事。「ジャパン」と答えると、日本語で話しかけてくれました。とっても話し好きの人で、1人1人の客に丁寧に説明しており、集合時間の迫っている私は気がききではありませんでした。時間ギリギリで間に合いましたが、最後ではなく、ちょっぴりホッ。でも、お陰で予定していたカフェラテが飲めませんでした。

そして、バスはポートアーサーへ。その前に、リッチモンドに寄り道(どこかで聞いたような名前)。ガイドさんが、「ポートアーサーに行く前に寄り道します」と言ったのに、私以外の人は聞いていなかったらしく、私がおその事を言っても誰も信用してくれません。どこまで信用がないの。

リッチモンドの町はビクトリアの田舎町とさして変わりませんが、少々散策。ここでやっと、カフェラテにありつけました。それを飲みながら、川沿いを歩き、最初に建造された石の橋と教会を見学。「これって、オーストラリアで最初？ それともタスマニアで？」。きつとガイドさん、説明してくれたんだろうな。

昼食は、ポートアーサーで。スープ、ローストラムに紅茶かコーヒー。メインが出る前にミントソースが出て来ましたが、オーストラリアの料理に詳しいN子さん、「ミントソースはラム、クランベリーソースはターキー」と教えてくれたので、「リンゴは豚でしょ？」と聞いたところ、即答で「いや、ポーク」と返事。一瞬、口を開けてあっけにとられた顔をしたと自分でも思う私。周りの皆も、「え～っ」と思ったそうです。本人も、何故「いや」と言ってしまったのか分からないそう。「暫く言われる」とこぼしていました。当然です、N子さん。

ポートアーサーの歴史的施設は、レストランと目と鼻の先。案内所に入って、それぞれランプを1枚ずつ貰いましたが、私はハートのQ。そのマークの板をめくると、その囚人の詳細が分かる仕組み。名前はモハメット何とか・・・だったような(すみません、記憶力が悪くて)、歳は20才で、馬を1頭盗んだ罪。隣のS子さん、26才だが英語で書かれた罪状が分からない。ガイドさんも分からず、通りかかった男性に聞いたら、「He had more than one wife」と言われました。つまり重婚罪、26才でねえ。次の部屋では、その人の監獄での仕事。皮肉な事に、

私は余り好きでない料理人。後で夫に話したら、「いいじゃないか、楽な仕事で」と言われました。確かに、鍛冶屋や何かより楽でしょうけれどね。料理人の夫と違うから、楽しくはないだろう。

歴史的建造物群を見学に行く前に、以前起こったライフル乱射事件現場だったパブ跡へ。周りの壁だけ残して、中の様子も分からない状態になっていました。人の記憶は曖昧なもので、何年前か誰もはっきり言えず、20年以上前とか言っていました。正確には1996年4月28日、入口で配られた日本語のパンフレットに、ちゃんと書いてありました。

監獄や見張り台、病院、教会等の跡を見て歩きましたが、独房の建物内でハプニング。Y子さんとIさんが気分が悪くなり、そそくさと建物の外へ出て行ってしまい、ガイドさんが心配そうに見に行き、残された我々は勝手に見学。建物の外へ出て気分も直った2人も加わり、次の建物へ。

色とりどりの花が咲いている道を通る時、ある葉を見て「これは食べられそう」と話し合っている人達が…。「これ、ジキタリスでしょ」と私が言うと、ガイドさんも「そう、ジキタリス」と答えていました。薬として使われる事もあるそうですが、元々は猛毒の植物、取り扱い注意ですよ、食べないで!!

ポートアーサーは歩き甲斐がありました。あゝ、疲れた。

次は、デビルスキッチンへ。断崖絶壁、切り立った崖の下は海、足のすくむ深さでした。散策の途中、ガイドさんから「道が分かれたら、左へ行くように」と言われていたので、二股を左に行こうとする皆に、「こっちが左」と言い張り、右の道から動こうとしないのは、大学で日本語を教えていたO子さん(本人の名誉のため、イニシャルは控えました…この思いやり)。右の道から来たガイドさんに「あっちですよ」と言われ、やっと納得したような。デビルスキッチンの名前の由来は、タスマニアデビルがよく食事をする場所だからだそうです、N子さんと私は悪魔の方だと思っていました。(まっ、タスマニアデビルも、元々は悪魔からですが)

ホバートに戻って、夕食のシーフードレストランの所でバスを降ろして貰いました。予約時間にはまだ間があったので、港の周りを腹空かしに散歩してレストランへ。

ここでも、ハプニングが。旅行会社から予約をして貰ったので、レストランがオートマテカリーにツアーのコースメニューにしている、アラカルトで注文しようと思っていた我々はびっくり。最初に出されたスープも飲んでしまったし、コースでも良いではないかと言っているのに、ビールを飲んでハイテンションになってしまったらしい◇さん(これも彼女の名誉のため)、ウエイトレスさんにくっついてかかっています。大部粘っていて、少々恥ずかしい思いをしていましたが、◇さん、やっと諦めてくれたよう。コースのメインはシーフードプラター、3種の味の生牡蠣、茹で海老、海老・白身魚・イカリング・ホタテのフライ(牡蠣のフライもあったそうですが、私にはなし…前日から差別されている私)、サーモンの燻製、タコの足の酢漬けと、なにしろ量が多くて食べ切れない。デザートは、ラズベリーとレモンのシャーベット、マンゴーのアイスの3種盛りと紅茶かコーヒー。あんなに残ってしまったのに、お腹がパンパン。それぞれにお土産にして持って帰りましたが、結局誰も食べず、そのままホテルに置いて来てしまったようです。

帰りはタクシーでホテルへ行くつもりだったのが、食後の運動でもしないと消化不良と、歩いて帰る事に心変わり。ガイドさんの「歩いて30分位」の言葉に乗ってしまいました。そこには落とし穴が…。ほんの数メートルを除いて、全て登り坂だったとは。ヒューヒュー言いながらやっとホテルに着いた時、一緒に歩いていたのN子さんだけ。スタート時点では7人いた筈だったけれど、又々薄情者。

言い忘れていたが、ホテルの部屋は2人ずつで5部屋。風呂のない部屋、電子レンジのない部屋とバラエティに富んだ部屋割でしたが、普段の心掛けが関係しているのか両方ないのは我々の1室だけ(ここでも不公平感を)。他の部屋の風呂を借りてゆっくり体を休め、ベッドに横になってポートアーサーの日本語のガイドブックを読もうと思ったのに、同じ箇所を繰り返し読んでいるような…電気を消して寝ました。

この日は別の部屋で酒盛り、夜中部屋へ戻って来たM子さん、暗い中をベッドに辿り着くのが大変だったそう。私、アイマスクをして寝ていたので、電気を点けても良かったのに。

さてさて最後の日、今迄の2日間はお天気に恵まれていましたが、この13日は雨模様。バスが迎えに来る3時半までは自由行動なので、美術館へ行ったA子さん、ホバート在住の友達に会いに行ったNさんを除いて、荷造り後はチェックアウトの10時までは各自部屋で寛ぐ事に。同室のM子さん、「捨てて行く」と言っていた体を洗うナイロンタオル(正式名は知りません)をしまっているのを見て、「捨てる筈じゃなかったの?」と聞いたところ、シャワールームに私のと二つ並んでいるのを見て、自分のはまだまだ使えると実感したそうです。そりゃあ、私のは汚れ拭きにしようと思ってとってあったヨレヨレですけどね。「勿体ない」と思ってくれた事は、光栄ですけど。勿論、私は捨ててきました。

チェックアウト後は、荷物をホテルに預けてホバートの町へ繰り出す事になり、昨日行ったサラマンカへショッピングに。あんなに毎日買い物をしているのに、又々買い物。高めのタスマニアウールのストールやセーターを買う人も…。メルボルンにいたら多分入らないと思う、子供用の上品なおもちゃ(高いという意味ではない)のお店は、結構楽しんで商品を吟味してしまいました。雨も大ぶりになったし、昼食前にお茶でもとカフェに入りましたが、いくら小さいからとは言え、パーティパイを食べているのはY子さん。言い訳をすれば、朝ご飯を食べていないそうですが、この後すぐご飯だよ。

お昼は、M子さんリクエストのベトナム麺を食べました。食後は、ブラブラとホテルまで繁華街を歩いて帰る事に。街一番の繁華街らしいのですが、日曜日のホバートは25年位前迄のメルボルンのように、閑散としていました。閉まっている店と開いている店が半々位。いや、閉まっている方が多いかな。朝、TVで宣伝をしていたシープスキンのお店が見つかったので、入ってみる事に。Tシャツが\$7.50と大安売りなので、タスマニアと書かれているのがお土産になると欲しかったのですが、XXLとか大きいサイズのみ、残念。ここでも、買い物をする人が。

ぐるぐると街中を歩いている内、道が分からなくなり、トラックの所にいた男性に道を尋ねてみました。道の様子を我々のため偵察に行き、違ふと合図しながら戻って来るM子さん。私とN子さんが道を尋ねるため歩いて行

くと、M 子さん、盛んに違うと合図。違うのは分かったの、道を聞きたいだけ。我々全員が勘違いをしていたが、目指す道は反対に歩かなければいけなかったのです。本当の事をバラすと、道が見つかるまで、教えてくれたあの男性を疑っていました、申し訳ない。

やっと、ホテル到着。未だ 30 分位あるので、庭で一休み。このわずかな時間も、ホテルのトイレに行く時、パブが空いているのを見つけた数人、ビールを買って飲んでいました。

別行動の 2 人も戻って来て、バスも到着。もう、ホバートを離れるのも数時間となりましたが、まだまだ油断は禁物な婦人部。ガイドの大久保さん、「良い勉強になりました」と言っていました、何の役に立つ勉強やら。この 10 人の面倒をみられたのだから、どんなオバタリアン（これは死語か）が来て大丈夫と思ったかな？

飛行場で、メルボルンから持参のお酒の残りを、「飲んで下さい」と渡していました。捨てるのが忍びないと言っていたので、ガイドさんにあげたらとアイデアを出しましたが、「私は別に勿体なくもない」と言ったところ、M 子さんから「ケーキだった勿体ないでしょ」と反論されてしまいました。これが太る原因と思いつつも、ケーキだったらお腹の中に捨てるかも。

我々から早く逃れたい(?)ガイドさんに促され、飛行場のゲートを通る時の検査でも、ヘアムースを持って引っかけた人や、アットランダムに荷物検査をされた人とか、お騒がせは相も変わらず。荷物検査をさせられた K 枝さん、自分に何か引っかかる原因があったのでは？ と気にしていましたが、たまたまだから。私など、前の人がボディチェックされたので、自分もと思って立ち止まって待っていたら、行って良いと言われてしまいました。

そして、待合室で椅子に座って搭乗を待っている時の事、私が持って来て N 子さんに貸した、荷物を運ぶ道具が折り畳めなくなってしまった。力任せに畳もうとする私を止めるのは M 子さん。力を込めないと畳めないと思っていたが、Y 子さんが簡単に畳んでしまった。しかし、畳めるのは彼女だけ、他の人が試してみてもダメ。飛行場の待合室で、ギャアギャア騒ぎながら皆でトライしているのに、1 人だけ簡単に畳んでいる姿は、安物のコメディの様だろうな。現に、笑っている人もいる。何度かトライして皆は畳めるようになったのに、肝心の持ち主の私だけが畳めない。なにより不思議なのは、以前はちゃんと畳んで使用していた筈。やっと畳んで、皆で大喜びしている姿も、コメディだろうな。ほら、やっぱり笑っているし。

皆の前でコメディショウを繰り広げている内に、搭乗時間。長い列に並ぶくらいなら、ゆっくり座っていて最後の方で乗れば良いと高を括っていたのは私と M 子さんと Y 子さん。乗って見たら荷物を上に置けない。背の高い Y 子さんと I さんが奮闘してどうにか納めてくれました。ジェットスターは荷物を預けるとお金がかかるようで、皆考える事は同じ。成るべく、手荷物で持ち込もうと言う魂胆。全然違う席の人が、早い者勝ちで、荷物を空いている所に入れてしまったそうです。先に乗って座っていた人から言われてしまいました。ここにも、思わぬ落とし穴が。

飛行中、日が眩しく窓際に座った私は、窓を半分位占めていましたが開けとくように言われ、飛行機の中なのにサングラスをしていなければなりません。

全員の搭乗が済んだのか、出発時間の 5 時 35 分より早く離陸していました。着陸時間は 6 時 50 分の予定が、6 時 20 分頃、窓の外に見える景色は、地上がやけに近い。「近く見えても、結構高い所を飛んでいるのよ」と言われましたが、どう見てもそうは見えない地面の近さ。車の車種も分かる程、どんどん高度を落として木のてっぺんに手も届きそうと思っている内に、あっけなく着陸してしまいました。離陸する時もやけに斜めで急上昇しているようでしたが、着陸もあっという間でした。

何はともあれ無事メルボルンに帰ってくる事が出来、一安心、やれやれ。飛行場に迎えが来ている人、長距離バスに乗る人、シティまでのスカイバスに乗る人と別れ、我々はスカイバスへ。

サザンクロス駅で、電車の利用線を調べると 30 分以上待たなくてはならない。どこかで食事と思って食べても食べる所もない。Food Courtと書かれているのに、駅員に聞くと、フードコートはないそうです。とは言え、30 分ではレストランには行けず、ホームで電車を待つ事にしました。普段は絶対にしないであろう、ホームのベンチに座って残っていたパンを食べました。私、最初の朝食のパンを 3 切れ持って来たのに、毎日朝食を買っていたので、まだ食べ物が残っている。

夫が迎えに来ているグレンウェバリーの駅に着いたのは 8 時 45 分頃。何故か、疲れがどっと出たなあ。

伊藤玲子 記

